

コミュニティ財団による小さな自然再生と資金循環

公益財団法人東近江三方よし基金 常務理事 山口 美知子

1. はじめに

2017年、全国で初めて市域のコミュニティ財団として東近江三方よし基金が設立された。コミュニティ財団とは、特定の企業や行政の資金拠出によるのではなく、市民立の財団のことであり、当基金は、772名からの寄付によって設立された。当基金の役割は、持続可能な東近江市の実現を目指して、社会的事業者に資金的支援や非資金的支援を行うことである。そこで、今回は東近江市版SIBの仕組みと、市内を流れる愛知川での小さな自然再生を組み合わせる実証事業を実施した。本報告では、①小さな自然再生の効果、②東近江市版SIBの効果について解説する。

2. 小さな自然再生の効果

本事業では、小さな自然再生により「絶滅危惧種の川ガキの復活」を目指すこととした。川ガキとは、川の豊かさを知り、その楽しみ方を知っている人という意味である。これを実現するために設定されたのが次の2つの事業である。

- ①愛知川漁業協同組合「簡易魚道の見試しで大人の川ガキづくり」：琵琶湖の固有種であるビワマスの産卵床を広げるため簡易魚道の見試しを行う。



簡易魚道の見試し活動

- ②NPO法人遊林会「「そとイコ」川ガキ育成塾のプログラムづくり」：森と川のつながりを知り、小さな自然再生が体験できるプログラムを作成・試行する。



川ガキ育成塾の試行

2つの事業に共通する効果として期待されたのが、川との関係時間の増加、団体スタッフの川への

行動・意識変化と目的関数の増加、実証事業の参加者の行動・意識変化とワクワク度の増加である。これらは、後述の第三者評価委員会による現地踏査の中で議論し決定され、これらの効果の見える化が、事業の成果目標に設定された。特に、①の事業では、ステークホルダーが多いことから、協働の川づくりの体制の構築も事業効果として重要とされた。

3. 東近江市版SIBの効果

SIB（ソーシャルインパクトボンド）は、イギリスで始まり、日本でも少しずつ導入が進んでいる。その具体的な解説は他に譲るとして、ここでは、その仕組みの概要と今回東近江市版SIBを活用することによって得られた効果を述べる。当基金の設立と同時にスタートしたこの仕組みは、行政の補助金改革と地域における社会的投資の普及を目的として始まった。東近江市版SIB事業では、支援する社会的事業者が決定した時点で、事業終了時に到達すべき成果目標を専門家や行政、事業者が出席する第三者評価委員会で決定してから事業が開始される。また、成果目標が設定できた段階で、その達成を条件に償還される出資（コミュニティファンド）の募集が行われ、集まり次第団体へ支払われる。本事業では、当基金が連携するプラスソーシャルインベストメント株式会社で総額220万円の出資募集が行われ、2週間ほどで目標額を達成した。当基金では、この出資募集の広報を手伝うことで、今回の関係者以外の市民や事業者へ本事業の主旨を伝え、その効果を共有する機会を得ることができた。それによって、これまで縁のなかった企業との連携が開始され、川とは直接縁のなかった団体からの出資が実現したという具体的な効果が生まれたことは、東近江市版SIBの仕組みを活用した最大の効果である。

4. おわりに

本事業は、2021年度環境省の地域循環共生圏プラットフォーム構築事業の支援を受けて実現した。この支援は単年度で終了したが、翌年もそれぞれの活動は発展し実施された。①の簡易魚道は2022年11月に再設置され、初通水した3日後にはビワマスの遡上が観察された。②の川ガキ育成塾には応募が殺到し、次年度以降もプログラムのさらなる発展に向け検討が進んでいる。何より、①の現場で川ガキ育成塾が開催された際の子どものキラキラした目は忘れられない。本事業は、小さな自然再生や東近江市版SIBというツールを使って、年齢も立場も超えて人をつなぐことが出来、それが地域の未来を拓く近道であることを教えてくれた。